

NEXT CONCERTS
》 次回東京定期演奏会

第 **769** 回

サントリーホール

フレトク 山野 雄大氏

2025年4月11日(金)19:00開演 18:30~

12日(土)14:00開演 13:20~

R.シュトラウスのスペシャリスト、リープライヒ
待望の《ツアラトゥストラはかく語りき》

指揮: **アレクサンダー・リープライヒ**

ヴァイオリン:
コリヤ・ブラッハー

ハイドン:交響曲第79番

ボリス・ブラッハー:ヴァイオリン協奏曲

アイヴズ:答えのない質問

R.シュトラウス:交響詩《ツアラトゥストラはかく語りき》

※当初の予定から変更になりました。

©Sammy Hart

©Felix Broede

1回券料金 S ¥9,000 A ¥7,500 B ¥6,500 C ¥5,500 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,000

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

アレクサンダー・リープライヒ 編

きき手 後藤 菜穂子

—今回の選曲についてお聞かせいただけますか?

プログラムの鍵となるのは、チャールズ・アイヴズの《答えのない質問》です。せいぜい5~6分の短い作品ですが、私にとってこの曲がなぜ重要かといえば、レナード・バーンスタインがハーヴァード大学で行った連続講義*でこの曲を取り上げていたからです。そもそも講義自体のタイトルが『答えのない質問』だったので。

アイヴズは1908年にこの曲を作曲しました——のちに改訂しましたが、今回は初稿で演奏します。バーンスタインによれば、この「質問」とは、20世紀の音楽はロマン派の長調・短調から成る和声のままでよいのか、それともこれからの世界は無調なのか、とい

うものです。すなわち、調性はどこへ行くのか、という問いであり、それは誰にも答えられない質問なのです。でも、はっきりした答えがないからこそ鍵だと思っんですね。

これは、続いて演奏するR.シュトラウスの《ツアラトゥストラはかく語りき》にも共通している問いです。有名な冒頭はオクターヴと5度で安定していますが、長調でも短調でもないですし、その後の曲の中心となるのは八音(C)と口音(B♭)という半音階的な対比なのです。さらには、フガートのテーマは12音の音列でできており、シュトラウスがすでに無調を意識していたことを示唆しています。そして最後はロ長調の中、コントラバスの八音のピッツィカートで静かに締め括られます。シュトラウスという大編成で派手なイメージがあるかもしれませんが、実は多くの曲には明快な答えはないのです。

—どちらの曲でも、トランペットが重要な役割を果たしますね。

そのとおりです。トランペットとは本来、合図(シグナル)を出す楽器です。《ツアラトゥストラ》では、トランペットは冒頭だけではなく、全曲を通じて20回ほど現れますが、つねにハ長調で、それは私たちが呼吸している空間であることを示しています。

それに対して、アイヴズでのトランペットは問いかけなのです——調性はどこへ行くのか、と。弦楽器がト長調の美しい協和音を演奏するなか、トランペットが問いかけ、それに対して管楽器が不協和音を奏でます。その対比があるからこそ、調性がより美しく聴こえるのです。

—プログラム前半は、ハイドンの交響曲第79番で始まり、ボリス・ブラッハーのヴァイオリン協奏曲ではご子息のコリヤさんがソリストをつとめます。

ハイドンは大好きな作曲家です。交響曲第79番は明朗で快活な曲で、それ以前の「疾風怒濤」時代の曲のようなラディカルさはありませんが、それでも楽章の途中で複雑な線があつて、がらりと曲想が変わるなど、発想が自由な点におもしろさを感じます。きっと楽しんでいただけたと思います。

ボリス・ブラッハーは第二次世界大戦後、ベルリンの音楽大学で長年教鞭を取った作曲家で、いわゆるドイツの前衛派とは距離をおいていました。彼の弟子には、^{モリツグ} 尹伊桑もいました。私は10年ほど前にブラッハーの《コンツェルトシュトゥック》をミュンヘン室内管弦楽団と録音しました。

今回演奏するヴァイオリン協奏曲は1948年に作曲された作品で、ヒンデミットのヴァイオリン協奏曲やハルトマンの《葬送協奏曲》などと同時代に書かれました。新古典主義的な作風で、とくにリズムの鮮やかさではハイドンと共通する部分があります。

ご子息のコリヤ・ブラッハーさんは、アバド時代のベルリン・フィルのコンサートマスターをつとめていらしたときによくお姿を見ていました。私はその頃、アバドのリハーサルをよく見学させていただいていたんです。初共演になりますが、彼の父君の作品と一緒にできることをたいへん楽しみにしています。

*1973年にバーンスタインが母校ハーヴァード大学で行った6回にわたる「ノートン講義」。テレビで放送され、のちにDVD化されたほか、書籍、CDにもなっている。

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan